

# ヴァナキュラー文化としての日本人のナチス語り

陰謀論への視点とツイッターについてのエスノグラフィーを添えて

横道 誠

## 0. はじめに

佐藤卓己が編著を務めた『ヒトラーの呪縛——日本ナチカル研究序説』（2000年初版、2015年増補版）に多彩な事例が紹介されたように、日本のサブカルチャーには「ナチカル」、つまりナチス（国民社会主義ドイツ労働者党）絡みの文化現象と呼びうる一断面がある。同書は日本人がいかに歪められたナチス像に憧れ、影響を受けてきたかを示す博物館となっている。

さて、最近の日本の民俗学会では伝統的な風習とは異なる現代の民俗を指す言葉として「ヴァナキュラー文化」という言葉がよく使われるようになった。島村恭則の『みんなの民族学——ヴァナキュラーってなんだ？』（2020年）が語るように、ヴァナキュラーは「土着」を意味するが、過去の習俗を示しがちな従来の「フォークロア」に変わる現代習俗を示す語だ。「ナチカル」は、海外由来とはいえ、日本土着のものと化した一種のヴァナキュラー文化と考えることができる。

篠田航一の『ヒトラーと UFO——謎と都市伝説の国ドイツ』（2018年）には陰謀論なども含めた現代ドイツの口承がさまざまに紹介されている。本論は、「ナチカル」に焦点を当てた日本の口承に注目しようとする。その際、政治的な語り（ポリティカル・ナラティブ）も口承と見なす。また SNS でのツイッターの「つぶやき」も同様に口承と見なし、そのエスノグラフィーを作成する。

## 1. 「ヒトラー自身がユダヤ人やったって言われています」

筆者は大阪に生まれ、大阪に育った。1980年代、小学5年のときの担任教師が社会科の時間にアドルフ・ヒトラーについて語りだし、「ヒトラーは独裁者になって、ものすごい数のユダヤ人を殺しましたが、じつはヒトラー自身がユダヤ人やったって言われています」と語った。少年時代の筆者は日本の歴史だけでなく外国の歴史にも興味があり、担任の教師に詳しく知りたかったので本を紹介してほしいと頼んだ。すると彼女は、当時は刊行されてから三、四年ほどが経っていた『アドルフに告ぐ』の最初の単行本を教えてくれた。学校の図書館では、私はこのマンガを発見できなかった。しかし地元の公立図書館には配架されているのを見て、夢中で読んだ。

マンガやアニメといった第二次世界大戦後に隆盛した日本文化をもっとも代表する人物と言える手塚は、『アドルフに告ぐ』で基本的に、彼らしい戦後民主主義的なヒューマニズムを物語形式によって訴えている。だが彼のこの作品は、ユダヤ系の人々だけでなく、一般的なヨーロッパ人にも支持されないだろう。

この作品で、ヒトラーはユダヤ系の血筋を引く人物として創作されている。彼はその出自を隠

し、ユダヤ人弾圧という政策上の矛盾とのほぎまで苦悩する。手塚にとっては独裁者の人間臭い本性を描くことが、ヒューマンズムの一表現だったのだろう。

ヨーロッパ人から見れば奇怪なこの演出は、日本では、勝者を礼賛するよりも敗者に同情することを重んじる判官鼻眞の伝統があることに関係している。手塚作品は敗者への同情を含んだかたちでの弱者へのいたわりという、ある種の判官鼻眞に満ちている。手塚のヒューマンズムとは、アメリカ式のそれに、日本人のこの敗者を大事にする伝統が融合したものだ。手塚はマンガのなかのヒトラーを哀れな、同情すべき敗者として描こうとしたのだった。

ヒトラーがユダヤ系の出自を持つという想念は、手塚自身から出てきたものではない。この見解は「フランケンベルガー説」と呼ばれ、ナチスの弁護士だったハンス・フランクの書物に源泉がある。

フランクは、1930年にヒトラーの依頼を受けて、ヒトラーの家系を密かに調査することになったと述べ、以下のように報告する (Frank 1955: 320-321)。ヒトラーの父方の祖母マリアは、父親不明の息子アロイス (ヒトラーの父親) を産んだ。マリアは、アロイスが14歳になるまで、グラーツに住むユダヤ人家族フランケンベルガー家に雇われ、高い俸給を受けとっていた。これは、マリアがフランケンベルガー家の当主、または息子に手をつけられて懐妊し、それがアロイスだということを暗示している。この調査を真に受けるならば、ヒトラーはユダヤ人の血を受けついでクォーターということになってしまう。

このフランケンベルガー説は、1967年に権威ある雑誌『シュピーゲル』で反論され (Spiegel 1967)、現在でも大多数の研究者が否定している。だが筆者は『アドルフに告ぐ』を読んだとき、ヒトラーがユダヤ人だと本気で信じてしまった。おそらく私だけのことではなかった。同級生たちは、このマンガを読んでいなかったとしても、担任教師の話聞いて、ヒトラーにユダヤ人の血が流れていると一時は信じた可能性が高いし、一部はいまもそのように信じているのではないか。

筆者は、日本人のこのようなナチス語りを「ナチスについての非政治的な語り」と呼びたい。それは特定の政治意識に立脚しておらず、ナチスという危険な香りがするものに惹かれ、異文化だからこそ無責任に関わることが許され、安全かつ自由に際どい話題を口にしたいという欲求に支えられている。

『アドルフに告ぐ』は、いまなお多くの日本人に読みつがれている。文化的関心が高い若者のために本や雑貨を売るヴィレッジ・ヴァンガードには、このマンガがよく陳列されている。それに対応するようにして、2021年初頭にヒットした日本映画『花束みたいな恋をした』(坂元裕二監督、2021年)では、文化的関心が高い主人公男女の本棚に『アドルフに告ぐ』が取まっている。この若い男女は、映画のなかで近過去にあたる2010年代の文化的な若者を体現している。この設定が暗示するように、いまの若者のうちにも、ヒトラーがユダヤ人だったと信じている人が、一定数いるのだ。

2022年2月、ロシアがウクライナに侵攻を開始した。ロシアのセルゲイ・ラブロフ外務大臣は2022年5月1日、陰謀論の世界観に染まっていることを仄めかすようにして、ヒトラーは

ユダヤ人だったと主張し、国際的な衝撃を引きおこした。筆者は本稿のもとになったドイツ語での口頭発表を思いだしながら、同月4日につきのようにツイートした。

去年ドイツの学会で発表したとき、手塚治虫の『アドルフに告ぐ』に言及して、日本にはこのマンガの影響でヒトラーがユダヤ人だと信じている人が一定数いる、私も小学生のときそうだったと説明した。ドイツの研究者たちから「衝撃的」と感想を言われ、満足したけど、ロシアがその衝撃を更新した。

私のツイートは拡散され、『アドルフに告ぐ』を読んでヒトラーがユダヤ人だと信じていた、あれは創作だったんですね、と驚いた日本人たちのリプライがツイートについていった。したがって、一定の日本人がヒトラーはユダヤ人だと信じているという私の推測は正しいことは判明した。しかし、ラブロフ外相の発言がスキャンダルとして報じられたことで、あるいは私を含めて多くの人がTwitterなどで反応したことによって、そのような人の数はかなり減ったのかもしれない。

## 2. 「南極ってナチスの基地があるんやて」

高校1年生の時、私は親友のひとりから「南極ってナチスの基地があるんやて」と聞いたことがある。当時、1994年前後はインターネットが普及する前夜で、グーグルやウィキペディアは影も形もなかった。図書館に行っても、そういった話題を扱ったオカルト本は収蔵されていないことが多い。だから私は古本屋を回ってナチス絡みのオカルト本を読み、情報の質と量に満足できそうなら購入した。それらの本のいかにもゲテモノめいた書名や、幽霊について語るかのようなコケ脅しが利いた文体が印象的だった。ナチス・ドイツと未確認飛行物体を関連づける論説は、信用するに足りないと考えるに充分だった。

私に南極ナチス基地説を語った親友も、それを信じてはいなかった。「都市伝説やろうけど、おもしろやん」と彼は言っていた。彼は新興宗教を信じる家庭に育ったが、特に政治的に偏向しているようには見えなかった。だから、私は彼から聞いた言説も「ナチスについての非政治的な語り」と呼ぶことができる。だがこの語りは、どのような経路を辿って、私の親友と私にまで辿りついたのだろうか。

第二次世界大戦後にナチスが南極で活動していたという噂の起源は、1939年にドイツが南極大陸の一部をほかの西側諸国と共同でドイツ領にすることを目的として、探検旅行を実施したことにさかのぼる (Summerhays / Beeching 2007: 1-3)。それから6年が経ち、ドイツが敗北した2ヵ月後に、ドイツのUボート (潜水艦) 2隻がアルゼンチンの海軍基地に上陸し、噂を呼んだ。Uボートはヒトラー、ヒトラーと心中する直前に結婚したエーファ・ブラウン、ナチス・ドイツの最高幹部たちを南極に運んでいく途中だったのではないかというのだ。一行はその後、実際に南極に渡ってその地に潜伏していると、ハンガリーからアルゼンチンに移民してきたある者が当地の新聞に発表すると、世界中の主要な新聞が、それがフェイクニュースだと理解した

いままに報道した (: 3)。

1950 年になると、『シュピーゲル』は、第二次世界大戦中の 1942 年にヒトラーとムッソリーニが UFO の実験をしていたと報じた (Spielgel 1950)。その結果、ナチス・ドイツはすでにそのような空飛ぶ円盤の飛行に成功していたという噂が流れるようになった。かつて親衛隊に所属していたヴィルヘルム・ランディヒは、1971 年の小説『トゥーレに対する偶像』で、南極をナチスの最後の活動拠点として設定し、そこから親衛隊の残党が UFO を使って世界を支配するフリーメイソンと戦っているさまを描写した。

また、それとは別に 1947 年、米軍が「ハイジャンプ作戦」と呼ばれる南極大陸の大調査を実施したことがあった。これに関して 1975 年、ヴィリバルド・マッターンとエルンスト・クリストフ・フリードリヒが、この作戦中に米軍機が南極のドイツ軍基地の上空を飛行し、報復として 4 機がドイツの秘密兵器によって撃墜されたと主張した (Mattern 1975; Summerhays / Beeching 2007: 15)。著者たちはランディングの本か、それに関する記事を読んだか、少なくとも伝聞でその内容を知っていたと推測できるだろう。

それでは、この虚構は、どのようにして 90 年代の日本の若者文化に入りこんだのだろうか。最重要の要素は、日本のオカルトブームだ。1973 年、五島勉の『ノストラダムスの大予言』が日本で出版された。この本は、ノストラダムスの予言「1999 年に恐怖の大王が降ってくる」を日本人に広く紹介し、21 世紀初頭までに巨大な破局（環境問題、核戦争、彗星衝突など）で人類が滅亡すると主張していた。同書はベストセラーになり、日本に第一次オカルトブームが巻き起こった。UFO、地球外生命体、オーパーツ（場違いな人工物）、超常現象、未確認生物、超能力、失われた大陸、先史時代の超文明、陰謀論などがメディアを賑わせ、人々は 20 世紀の終わりを不安に遠望した。

ひるがえって 1980 年代に、オカルトブームはいったん収束し、鳴りを潜めた。1979 年、ハーバード大学の社会学者エズラ・ヴォーゲルが出版したノンフィクション『ジャパン・アズ・ナンバーワン』が世界的なベストセラーになった。1980 年代は、日本経済がもっとも輝いていた時代だったと言える。だが 1985 年に始まったバブル経済と呼ばれる好景気が、1991 年から 1993 年にかけて崩壊し、それから日本では「失われた 30 年」と呼ばれる衰退の時代が始まった。加えて深刻なことに、1970 年代のオカルトブームの際に蒔かれた種が、1980 年代にさまざまな新興宗教を発生させて、その究極的な帰結が 1990 年代のオウム事件だった。

その 1990 年代に入ると、20 世紀に終わりがさらに迫ったことで、第二次オカルトブームが発生し、ノストラダムスの大予言、ミステリーサークル、人面犬や人面魚といった超常現象（に見えるもの）が世相を騒がせた。そんななかで 1995 年 1 月、阪神・淡路大震災が日本を震撼させる。同年の直後、オウム真理教が東京の地下鉄で無差別テロ事件を実行する。日本のテレビや雑誌は、ますますオカルト絡みの記事で溢れかえった。このような世相を背景として、筆者は親友から南極にはナチスの基地があると吹きこまれたのだ。おそらく彼は、その都市伝説をテレビ番組か、深夜ラジオ番組、あるいはオカルト雑誌の『ムー』で仕入れたのだろう。

グリム兄弟が活躍した 19 世紀、グリム兄弟を含めてロマン派の詩人、作家、芸術家、学者、

批評家たちは、口承は基本的に「民」から生まれると信じようとした。そこには伝統的な民衆と近代的な「国民」を重ねながら、美化する非合理主義的な心情が働いていた。20世紀前半になって、この説に反論する先駆者、アルベルト・ヴェセルスキーが登場する。彼は、多くの昔話の源泉は「民」ではなく「書物」だということ、「民」の能力は生産することよりも再生産することにあるという画期的な見取り図を提示した（Wesselski 1931: 123-131）。書物やマスメディアが口承を生みだし、それが「民」に波及していくという現代社会でもよく見られる現象が、初めて研究者たちの視野に入るようになっていた。ナチス南極基地説はドイツに発生し、日本のテレビ番組、ラジオ番組、雑誌などを伝って、親友の口から出た「非政治的な語り」として私に到達した。

### 3. ナチス・ドイツに関するオカルト語り——サブカルチャーと書籍

1970年代の第一次オカルトブームの頃、日本のサブカルチャーにはナチスに由来するモチーフが多く確認されるようになった。この時期の日本では、数多くのテレビアニメや特撮テレビ番組が制作され、日本人のある種の「幼年期」を形成しはじめた。石森章太郎（のちの石ノ森章太郎）原作の『仮面ライダー』（1971-1973年）は、主人公のヒーロー像だけでなく、「ショッカー」を名乗る敵組織も子どもたちに強烈な印象を残した。そのショッカーは、ナチス残党だと設定されていた。

『仮面ライダー』に匹敵する人気を誇る『機動戦士ガンダム』（富野由悠季監督、1979-1980年）では、主人公側の「地球連邦軍」が敵国「ジオン公国」と交戦する。ジオン公国は、巨大な人工衛星に設置された居住空間（スペースコロニー）に位置し、ナチズムを連想させる国粋主義を取っている。その独特なナチス風の美学によって、ジオン公国はときとして、国連軍を連想させる地球連邦軍よりもファンに支持されてきた。

異様なのは、「ジオン」の名が離散時代のユダヤ人がイスラエル建国をめざしたシオニズム運動に由来する、すなわちユダヤ人の民族的象徴としての「シオン」の山に由来しているという点だろう（福嶋 2018: 215）。物語を追って行くと、理想主義者のジオン・ズム・ダイクンがこの国のかつての指導者で、宇宙時代には「人の革新」が起こって「ニュータイプ」が生まれると主張したこと、ダイクンの死後、ジオン公国はザビ家という勢力によって篡奪されたことが明らかになる。そして、そのザビ家を率いるギレン・ソド・ザビは、父から「ヒトラーのしっぽ」と呼ばれ、ヒトラーさながらの大衆扇動術を身につけた人物として描かれるのだ。つまり、ナチス的な勢力によってシオニズムを篡奪された国家がジオン公国だ。

ヨーロッパから遠く離れた日本では、ナチスの美学もユダヤ文化も、どちらも西洋のエキゾチックで神秘的な文化として受けとめられる。このような設定を楽しむファンたちの政治意識は多様で、一概に偏向しているとは言えない。ナチスのモチーフが人気を博しても、それらは作品内で非政治的に語られるし、視聴者たちも非政治的に受けとっている。

このような事例は事欠かない。洗練された巨大ロボットなどのデザインが人気を博してきた『ファイブスター物語』（永野護、1986年連載開始）には、ドイツ語が頻繁に登場する。作者は

ナチス時代の軍事兵器への愛好を隠さない。1990年代にテレビ放映され、世界中で人気を博したテレビアニメ『新世紀エヴァンゲリオン』（庵野秀明監督、リメイク版を含めると1995-2021年）シリーズにも、「ネルフ」「ゼーレ」などドイツ語の組織名が頻繁に登場し、主要人物のひとりの少女は日本語とドイツ語を話すバイリンガルだ。監督の庵野秀明もやはり軍事マニアで、作中のメカニック描写からは、ナチス時代の工業デザインへの憧れが透けて見える。

1995年に起きたオウム真理教による東京地下鉄への大規模なテロ事件は、化学物質のサリンによって引き起こされた。ナチス・ドイツで開発されたサリンが選ばれたのは、おそらく偶然ではないだろう。なぜなら、この教団は、日本のオカルトブームや、それに影響されたテレビアニメ、特撮テレビ番組などの影響を強く受けていたからだ（プランク 1995）。

以下では、ナチス的なものが日本でどのように広まっているか、その外縁を知るために、いささか極端な例を確認しておこう。この20年近くに日本で出版されたナチス絡みのオカルト的な出版物をいくつか見ておきたいのだ。そのような書物すら、一定の影響力を振るってきた。

2000年に刊行された笹川英資の『超権力グローバル・ゲーム——爬虫類DNAと人類支配の秘密』では、人類は「爬虫類人類」に支配されていると語られる、その爬虫類人類とは、ユダヤ人のことだ。しかもナチス自体がじつはユダヤ人の政党だった、現在世界を支配しているのはナチス党の後継組織で、つまりはアメリカだ。アメリカ人は恐竜の地球支配を復活させようともくろんでいる。どうだろうか。あまりに荒唐無稽で、どのようなコメントを返して良いかもわからなくなるのではないか。

2002年には、ロータル・マハタンの『ヒトラーの秘密の生活』が日本語で刊行された。原典がドイツで出版された本書は、ヒトラーが同性愛者だったと主張し、真実味のない逸話が多く記されている。驚いたのは、インターネット上のレビューサイトなどを確認する限り、ドイツでも多くの読者に受け入れられているように見えることだ。日本では優れた文学書を数多く出版してきた文藝春秋から出版された。

2007年にはジム・キースの『ナチスとNASAの超科学』が出版された。これは1994年に刊行されていた『〈超極秘〉第四の選択——宇宙植民計画の巨大陰謀 〈UFO・秘密結社・世界支配〉第三の選択を超える恐怖のプログラム』を増補し、改題した本だ。最初の邦訳の書名と改題後の書名との落差が目立っている。1990年代には、第二次オカルト・ブームに乗って売れるように、いかにもゲテモノめいた書名が選ばれたのだが、ブームが終わっていた2000年代には、科学的な印象を持った簡潔な書名を与えることで、読者の知的好奇心に訴えようとしたと推測される。

この書物でキースは、ナチス・ドイツの技術が戦後にアメリカやソ連に流出したと述べる。それ自体は歴史的事実と言って良いはずだが、キースはその技術史をSF風に紡いでいく。ナチスはじつはUFOの開発に成功していたのだが、アメリカがその技術をさらに発展させた。現時点ですでに月や火星にはコロニー、つまり地球人の植民地ができている。支配者だけが、居住に適さなくなりつつある地球を離れ、地球外のコロニーに移住することができる。この本には、UFOや地球外生命体の居住地のカラー写真も掲載されているが、誰でもパソコンで写真を偽造できるようになった21世紀には、それらの写真にたいした威力はないだろう。

2014年、オカルト雑誌『ムー』は2月号で「南極のナチス第4帝国と地底UFO」と題する特集を組んだ。同誌では以前から同様の特集をたびたび組んでいたが、同号はその集大成と言えるものだった。ライターの前田真一郎は、つぎのように解説する（前田 2014: 14-37）。ナチスは南極探検を実施した時点で、すでに要塞を築いていた。ヒトラーは聖遺物の「聖なるロンギヌスの槍」の力によって「アカシックレコード」という超次元意識と連絡し、その力を借りて1933年にドイツの政権奪取に成功した。ところで、かつて南極上空に現れた「スターゲイト」を伝って異界人は地球に来訪し、古代超文明を築いていた。南極大陸の地底に生きのこった彼らと接触を果たしたヒトラーは転生して、地球外知的生命体の再度の来訪を待っている。近い将来、「人類究極の日」（ハルマゲドン）が起り、第四帝国と知的宇宙人が手を組んで、最終戦争を始めることになる。

このたぐいの書物で開陳される陰謀論のうち、一定の独創性を帯びているのが2020年に刊行された飛鳥昭雄と三神たけるの『失われた悪魔の闇預言者「ヒトラー」の謎——ペンタゴン魔法陣に潜む闇の女霊媒師が地獄の墮天使ルシファーを召喚している!!』だ。飛鳥によれば、日本人の祖先はユダヤ人で、神道はもともとユダヤ教と同じだった。イスカリオテのユダは、腹が裂けて内臓が出た状態で首を吊って自殺したのだが（と著者らは主張する）、これが日本人の切腹の原型になった。暗黒のカラスの姿をした悪魔の化身は、古代ではユダを、現代ではヒトラーを支援し、ヒトラーは墮天使ルシファーの預言者と化した。ヒトラーが闇の世界の地底人と接触した結果、ナチス・ドイツの科学技術は飛躍的に発展し、UFOの開発にも成功した。終戦時、ヒトラーの超能力を手に入れようとしたアメリカは、彼の亡命願いを受け入れて、ペンタゴンの地下に匿うことにした。ヒトラーは地底人の遺伝子を移植され、現在も存命中だが、全身がガン細胞の塊だけで構成された生ける屍となってしまった。

これらの出版物に記された陰謀論は、いずれも笑止千万と言うしかあるまい。多くの読者はこれらを娯楽として楽しむ、つまり空想的な奇談と承知の上で読むだろう。それは伝統的なお伽噺や怪談と同様の受容と言える。現代人はそれらを、部分的に事実かもしれないにせよ、基本的には虚構の要素が混じった創作として喜ぶ。そこにあるのはおとなの言語遊戯だ。

だが、世のなかには真実と嘘を見分けるのが苦手な人も一定数いることはたしかだ。そんな創作や陰謀論を本気で信じてしまい、それがその人のあるいはカルト教団や過激な政治行動へと導くことになる。

また当然ながら、これらがどれだけ愚かしく見えたとしても、それなりの影響力を発揮する。少なくとも学問的な専門書よりも、はるかに読まれ、はるかに多くの人を信じさせているだろう。陰謀論を軽んじるのは不当だ。陰謀論は危険だからこそ、その重大性を理解しなければならない。

陰謀論を信じた人々は、そのうさんくさい語りと自分自身の政治的な信条とを混ぜあわせ、さまざまな場所で発信する。そうして生まれた語りは、表面的にはそれほど奇抜でないとしても、ナチスについての政治的な語り流れこんできていて、その人のほかの主張と溶けあったものかもしれない。

#### 4. 憲法改正のためにナチスの手口を真似る？

歴史記述には必ず虚構の要素が含まれる。なぜなら時代が変わり、価値規範が変わると、その変化した基準に従って過去の歴史は再編成され、新たに改変された歴史記述が出現してくるからだ。その再編成によって、過去の一部の事象はより重要視され、それなりの位置づけを与えられ、別のテーマは等閑視されて、目立たない位置づけへと放逐される。

1995年から1996年にかけてNHKが放送したテレビシリーズ『映像の世紀』は、大きな人気を博し、繰り返えし再放送がされたあとに、再構築された新シリーズなども作られるようになった。

世紀末に、20世紀全体を「映像の世紀」として振りかえるという趣旨で、映像の威力に焦点を当てながら全10回が制作された。第3回が「ヒトラーの野望」と題され、第4回が「世界は地獄を見た」と題された。前者はナチス・ドイツの勃興を中心に同時代の世界史を描写し、第4回はドイツと大日本帝国が第二次世界大戦でいかなる盛衰を経たかを追っていく。第3回を見ると、ナチス・ドイツという国家が当時のドイツ人に与えた圧倒的な印象を追体験することができる。第4回を見ると、ヨーロッパとアジア太平洋地域で起きた大災害が、人体の破壊描写を交えて語られる様子を、目撃することができる。

このふたつの回は、ナチス・ドイツと第二次世界大戦に対して戦後の日本人が長らく保持してきた見取り図を示している。ナチス・ドイツは不気味で恐ろしい雰囲気をもっていたが、美的に傑出した面があった。ヒトラーは傍若無人の独裁者だったが、唯一無二の偉大さをも感じさせた。これは、ナチスに熱狂していた1930年代のドイツ人の体験世界を、1990年代の日本人にも共有してもらった演出だったのかもしれないが、公平に言って、ナチスを誤解させるという意味でかなりリスクが大きい手法だった。

第二次世界大戦も日本人好みの仕方では描かれている。というのも、ナチスの強制収容所での大量虐殺と、広島および長崎に投下された2発の原爆が、全体のクライマックスを構成しているのだ。ドイツ人がこうむった戦争被害や、日本人が東アジアや東南アジアで働いていた蛮行については、ごくわずかにのみ紹介される。結果的に日本人はユダヤ人と並ぶ悲劇の主人公として君臨する。

戦時期に対する理解に関して、ドイツでは、日本とはちょうど逆向きの傾向が働いていた。多くのドイツ人が空襲などの犠牲者になった事実は、長年にわたって、ほとんどタブーと見なされてきたのだ。20世紀から21世紀への転換期に、第二次世界大戦時のドイツ人犠牲者について公に語られる機会が増えた。W. G.ゼーバルトの『空襲と文学』（1999年）やイェルク・フリードリヒの『炎上——1940年から1945年の爆撃戦下のドイツ』（邦題は『ドイツを焼いた戦略爆撃——1940-1945』）などが典型的な書物だ。ギュンター・グラスは『蟹の横歩き』（2002年）で、戦後に旧ドイツ領でドイツ人に襲いかかった追放処分を小説にして、物議を醸した。

それでも現在に至るまで、ドイツ人は——少なくとも良心的なドイツ人は——自分たちを被害者でなく加害者として位置づけることに誇りを見せる。それは、自分たちを加害者でなく被害者として位置づけることを好んできた日本人と際立って対照的だ。



日本人が学校で戦争に関して教わるのは、東京や大阪などへの米軍の大空襲、沖縄でのゲリラ戦、広島や長崎への原爆投下など、戦争中に日本の民間人が受けた悲劇が中心だった（西尾 2011: 307）。一部の軍人、特に神風特攻隊のことを聞くこともあるが、戦争末期に強制的に徴兵された学生や市民らにまつわることが多いから、「かわいそうな日本の民間人」の語り属する。1980年代以降、ようやく東アジアや東南アジアでの日本軍の蛮行が、学校で教えられるようになったが（西尾 2011: 307-308）、それに対する反動のようにして、1990年代には、日本の蛮行を正当化する右派知識人が活動するようになった。小林よしのりのマンガ『戦争論——新ゴーマニズム宣言 SPECIAL』は、この動向を象徴する書物と言って良い。

20世紀には、戦時の残虐な行為の写真などを子どもたちに見せ、戦争の悲惨さを認識させる教育が主流だった（臼井 / 古俣 2001: 25）。現在の学校の授業では、暴力的な描写は避けられる傾向にあるが、日本人の被害者としての側面が強調され、加害者としての側面がテーマ化されにくいことは変わっていない。

ドイツと日本の事情の差はどこに起因するのか。前提になるのは、敗戦状況や戦後の国際関係だろう。ドイツはアメリカ、ソ連、イギリス、フランスに敗れ、この4つの国に分割された。そして、ヨーロッパは列強が密集していた地帯だ。分断された4つの地域が合同して新たに成立したドイツ連邦共和国（西ドイツ）が国際的に孤立しないためには、自国の野蛮な振る舞いを謝罪し、反省することは不可欠だった。他方、ドイツ民主共和国（東ドイツ）は、共産主義がナチズムに勝利したことを祝い、ナチス時代の非難と責任をすべて西ドイツに転嫁してしまった。これがドイツ人たちが体験した状況だ。

これに対して、東アジアでは事情がまったく異なっていた。日本は、おおむねアメリカ一国に敗れたし、実際に戦後の日本はアメリカのみによって占領統治された。日本人は、東アジアや東南アジアの国々に大々的に謝罪する必要を免れた。たとえ戦時中に日本によって被害を受けた近隣諸国を顧みなくても、米国との同盟関係に頼りさえすれば、政治的にも経済的にも生きることができた。戦後の数十年間、日本は戦前の数十年と同様に、東アジアで唯一の強国だったから、そのようなことが可能だったのだ。

それが、この30年で状況は一挙に複雑化した。日本の経済停滞は1990年代から始まったが、中国はそれと対照的に急成長を続け、21世紀初頭には日本のGDPを追いこしてしまった。韓国は、多くのハイテク分野で日本を凌駕するに至り、韓国人のひとり当たりのGDPはすでに日本人のそれを凌いでいる。北朝鮮は依然として貧しい国のままだが、その独裁政権は核兵器でもって日本人に不安を与えている。台湾は、日本と領土問題を抱えつつも、多くの場面で日本に同調しているが、東アジアで勢力圏が特別に大きいとは言えない。長年にわたってアメリカの最大の仮想敵国でありつづけているロシアは、日本との関係を曖昧にしてきたが、2022年に始まったウクライナ侵攻によって、はっきりと敵対するに至った。

中国、韓国、北朝鮮は何十年前前から日本に対して、第二次世界大戦で日本が果たした役割をもっと反省するよう要求してきたが、過去には日本は——それなりの賠償金を払いつつも——おおむね無視することができた。しかし、いまはそれができなくなっている。日本は東アジアの

パワーバランスのなかでは、もはや優位性を喪失している。それなのに、日本人は第二次世界大戦で日本が受けた犠牲について学びつづけ、日本が海外でやってしまったことについては知らない。この無知が理由で、多くの日本人は近隣諸国に対して反感（ヘイトの感情）を高めている。

このような国際関係を背景として、現在の日本では憲法改正問題が議論されている。日本国憲法はいわゆる「硬性憲法」で、条文を変えることは難しく、1947年の施行以来、一度も改正されたことはなかった。2022年春に改憲賛成の党勢力が、改憲可能な議席数を達成したことで、改憲は現実味を増している。他方、日本は憲法第9条で軍隊を持つことを自国に禁じているが、それなりの規模の独立国家は通常、常備軍を保持しているという事実に対応して、「自衛隊」という違憲の常備軍を保有しつづけている。この状況は70年以上も変わっていない。右翼勢力は憲法を変えようとし、左翼勢力はこれに抵抗する。飽くことなく繰り返されてきた日本の伝統的政争劇だ。

加えて、「憲法第9条問題」より重要度がさがるとしても、「靖国神社問題」がある。東京の靖国神社には、戦没者が祀られてきたのだが、戦犯として有罪判決を受けた人たちも合祀されている。日本のために戦って死んだ人を戦犯と指定されたか否かで区別するのはおかしいというのが、この神社の見解だ。この考えに共鳴して、日本では最高権力者にあたる内閣総理大臣をはじめ、多くの政治家がこの神社を訪れてきた。日本の周辺諸国はこれをつねに非難している。

日本人のあいだで一般化したナチス語りと、この政治状況が合わさって、つぎのような政治的な語りが生まれた。2013年、安倍晋三政権の副総理兼財務大臣だった、つまり日本第2位の権力者だった麻生太郎が、こう語ったのだ。

僕は今、（憲法改正案の発議要件の衆参）三分の二（議席）という話がよく出ていますが、ドイツはヒトラーは、民主主義によって、きちんとした議会で多数を握って、ヒトラー出てきたんですよ。（略）ヒトラーは、選挙で選ばれたんだから。ドイツ国民はヒトラーを選んだんですよ。間違わないでください。（略）靖国神社の話にしても、静かに参拝すべきなんです。騒ぎにするのがおかしいんだって。静かに、お国のために命を投げ出してくれた人に対して、敬意と感謝の念を払わない方がおかしい。静かに、きちっとお参りすればいい。何も、戦争に負けた日だけ行くことはない。（略）日露戦争に勝った日でも行けって。（略）いつから騒ぎにした。マスコミですよ。いつのときからか、騒ぎになった。騒がれたら、中国も騒がざるをえない。韓国も騒ぎますよ。だから、静かにやろうやと。憲法は、ある日気づいたら、ワイマール憲法が変わって、ナチス憲法に変わっていたんですよ。だれも気づかないで変わった。あの手口学んだらどうかね。わーわー騒がないで。本当に、みんないい憲法と、みんな納得して、あの憲法変わっているからね。（辻元 2013）

この政治的発言に対して、国内外からさまざまな批判が寄せられ、麻生は発言の「撤回」を表明した。批判されたのは倫理的な観点からだけではない。麻生が2017年にもナチスに言及する発言をした際には、ナチズムの専門家からは、麻生のドイツ史の理解が間違っていると指摘され

た(礫川 2017; 長谷部 / 石田 2017)。麻生の語りは、彼の不正確な知識に基づいていた。麻生の知識の源にあるのは、なんらかの政治的な言説なのだろうか。そうだとすると、日本では「ナチスについての非政治的な語り」が流通してきたという事情が、麻生の語りを可能にしていると考えたのではないか。「ナチスについての非政治的な語り」はサブカルチャーの世界を土壌としてきたことを述べたが、麻生にはマンガなどのサブカルチャーに親しんできた政治家という側面もある。

ナチス・ドイツが悪の国家だったということを、多くの日本人は知っている。だがナチズムのイメージは日本では美化され、そうして広く受け入れられている。ドイツの当時の体制が、圧倒的で壮大なものとして感銘を与える。他方で、いまの日本人は長年の経済停滞が原因で、閉塞感にあえいでいる。ある意味では、戦間期のドイツに似ているとすることができるかもしれない。このような状況を背景として、麻生は「ナチスの手口」を真似るべきだというグロテスクな提案をすることができたのだ。本稿のもとになった2021年のドイツ語発表の時点で、つまり麻生の最初の「ナチス発言」の8年後にも、麻生は菅義偉政権でナンバー2の権力者のままだった。

## 5. ナチスのイメージを踏まえてツイートする

おそらく「ナチスについての非政治的な語り」は、麻生がやったような「ナチスについての政治的な語り」と相補的な関係にある。「ナチスについての政治的な語り」があるからこそ、サブカルチャーの世界にナチスのモチーフが浸透し、そこからかつて私の担任教師が語ったヒトラーがユダヤ人だとか、私の親友が語った南極にナチスの基地があるとかいった「ナチスについての非政治的な語り」が生まれたのだろう。そして、そのように、サブカルチャーの世界のナチスについてのモチーフや、そこから生まれた「ナチスについての非政治的な語り」が、多くの人にナチスについての関心の種を蒔いたり、ある人のなかでその関心を維持させたりするのに力を貸して、「ナチスについての政治的な語り」を生みだしているのだ。

筆者は、2021年4月にツイッターのSNS空間を対象とした一種のフィールドワークを試みた。ナチスについての語りを検索し、翌5月にそれを整理したのだ。政治的立場を違えるさまざまなインフルエンサーが、アクチュアルな問題をナチスの時代と結びつけていることが明らかになった。以下に、主要なものを挙げてみよう。

映画評論家の町山智浩は、2021年4月29日にツイートした。

ナチス・ドイツの悪事を批判されても普通のドイツ人は怒らない。あれは間違った体制だったと反省し、二度と繰り返さないよう。でも、日本では、大日本帝国の悪事を批判されると自分が批判されたように与党までが反応する。今は日本国という、違う憲法に基づく違う国家体制なのに。

ここにあるのはいかにも左翼らしい、日本の政治をドイツの政治と比較しながら批判する内容だ。ツイッターではこのような議論は反対者たちから「海外出羽守」あるいはたんに「出羽守」

と揶揄される。「欧米では」「ドイツでは」などと海外の事例を引きあいに出して、日本の現状を批判する態度に嫌悪感が表明されるのだ。

ジャーナリストの岩上安身は、4月26日に当時の菅政権が計画している憲法改正について、ツイートした。

5月6日に、与党政府は、国民投票法の改悪法案の採決を急ごうとしています。それが通れば、改憲CMに規制もなく、期日前投票にも制限がかかって投票率が落ちて、組織投票の多い改憲勢力が有利になります。改憲が通ればナチスばりの緊急事態条項が導入され、発令されると独裁戦時体制に。菅政権にNOを。

改憲すればナチスの体制に似た何か生まれるのではないかと言う危機感が、日本の左翼には一般化しているため、「ナチスばりの緊急事態条項」という表現を用いることで、国民投票法の「改悪法案」に対して注意喚起がなされている。

国民投票法とは、「日本国憲法の改正手続に関する法律」のことで、2010年に施行された。日本国憲法第96条第1項は、日本国憲法の改正のために、衆議院と参議院の総議員の3分の2以上の賛成が必要で、かつその賛成を得られたら国会は国民に提案し、国民投票によって過半数の賛成を得なければならないと規定されている。しかし、具体的な手続きについては記載されていないため、この法律によってそれが規定されたのだった。同法は2021年6月11日に改正された。

当時は緑の党に所属していた、2022年現在はいわ新撰組に所属する長谷川尤子は、29日につきのようにツイートした。

危機下で「財政健全化」のような緊縮策に固執した結果、極右や軍国主義の台頭を招く事態は、歴史上何度も繰り返されて来ました。昭和恐慌、ナチス台頭、ギリシャ危機…あやまちをくり返さないためにも、十分な補償と一律給付を。

政府によるコロナ禍での補償が充分でないことを野党の側から批判する内容で、給付金の一律支給を訴えており、その際、緊縮財政によって「昭和恐慌、ナチス大統、ギリシャ危機」が発生したことに注意を促している。

歴史学者でグラフィックデザイナーの山崎雅弘は、8日に作家の平野啓一郎が『西日本新聞』に載せた記事の引用をツイートした。

「聖火リレーは、1936年のベルリン五輪で、ナチス政権がプロパガンダを目的に考案した演出である。NBCの批判は、この点も強調しているのだが、日本ではそれに触れない記事も目についた。報道機関としての姿勢を疑う」

2021年の東京オリンピックに反対していた左翼知識人たちが、ベルリンオリンピックを引きあいに出して、聖火リレーの伝統をナチス由来だと批判することで、善悪の観念に疎い右翼勢力を攻撃しようとしたのだ。

スリランカから日本に来ていた女性ウィシュマ・サンダマリは、2020年8月に不法残留の疑いで、名古屋の出入国在留管理局に収容され、2021年3月に死亡した。これが入管当局による不備として社会問題になり、国内外の多くの人が反応した。ジャーナリストの望月衣塑子は、この世論を受けて、日本の出入国在留管理局で7年間も過ごしたスリランカ出身の男性について13日にツイートした。

7年の長期収容は異常だ／施設に計7年以上収容され、一時的に収容解く仮放免の期間延長申請で入管訪れていたスリランカ人の男性（36）は、抗議活動を見て「入管はナチスの強制収容所と同じだ」と話した。

スリランカ人が「ナチスの強制収容所と同じだ」と訴え、気骨のあるジャーナリストとして知られた望月がこれを広く拡散したのだった。

フィールドワークをした時期には、化粧品会社DHCの社長、吉田嘉明のヘイトスピーチも社会問題として批判を浴びていた。以前から吉田は反韓感情を自社のウェブサイトなどで表明していたのだが、2020年11月に彼は「サントリーのCMに起用されているタレントはどういうわけかほぼ全員がコリアン系の日本人です。そのためネットではチョントリーと揶揄されているようです。DHCは起用タレントをはじめ、すべてが純粋な日本人です」と主張した。これを批判的に報じたNHKについて吉田は反応し、2021年4月9日、ウェブサイトに「幹部・アナウンサー・社員のほとんどがコリアン系」、「日本の敵です。不要です。つぶしましょう」と見解を載せた。

映画監督の想田和弘は4月9日ただちに、ツイートした。

この人の発言、あまりに差別的すぎて企業として自滅行為だろうと思うかもしれないが、残念ながら、この手の発言に共感し喜ぶ日本人は驚くほど多い。そういう意味では自滅行為どころか、人気取り戦略なのではないか。トランプもそれでのし上がった。ナチスも同様。実に危ない。

吉田がやっているのは、トランプやナチスと同列の悪質な「人気取り戦略」だと批判されている。

経済評論家のエミン・ユルマズは、11日につきのようにツイートした。

人権問題に関して中立はあり得ません。ココシャネルは偉大なデザイナーでしたが、ナチスとの関係は80年経った今でも強く非難されています。大企業のオーナーには社会的な責任

があります。利益だけを出せばいいものではありません。

ココ・シャネルはナチス・ドイツがフランスを占領していた第二次世界大戦中、ドイツの諜報員と交際し、対独協力（コラボラシオン）に従事していた。敗戦後、シャネルは協力者としての処罰を免れたが、現在に至るまで彼女を批判する声は絶えない。ユルマズはそれを引きあいに出して、吉田の企業の長としての倫理観を批判している。

9日の時点で、中国で起きていた別の社会問題と関連させて吉田を批判したのが、chocolat.だ。

ウイグルガー！中共ガー！と言いつつ同じ口でDHC会長の発言を擁護している人が散見されますね。残念ながらDHC会長の発言は中国政府によるウイグルでの行いや、ナチスドイツによるユダヤ人等に対しての行いと同じで「差別」や「人権侵害」と言われるものですよ。

問題になっている別の社会問題とは、中国によるウイグル人の大量虐殺が噂される新疆ウイグル再教育収容所の件だ。chocolat.は、中国共産党の政権を批判しながら、吉田を擁護する右翼を批判し、吉田の見解と中国の政策を「ナチス・ドイツによるユダヤ人に対しての行いと同じ」と論じる。

実際、ウイグル問題に関して、この時期には左右を問わずに多くの知識人が声をあげていた。2020年に欧米諸国や日本が中国を非難し、ロシアやイスラム諸国などが中国を称賛するという国際的抗争が起きていたが、2021年6月22日に開かれた国連人権理事会では、改めて欧米諸国と日本など40カ国以上が、新疆ウイグル自治区で起こっている人権問題について「深刻な懸念を抱いている」と共同声明を発表し、中国に対して国連人権高等弁務官による同地区の訪問と調査を受け入れるよう要求した。

前述のchocolat.のほか、左翼側では早坂隆が、右翼側では坂東忠信、百田尚樹、北村晴男らが、ツイッターで批判を展開した。

早坂は4月6日につきのようにツイートした。

一部の政治家や論者の中に「過剰な中国批判は控えよう」という声があるようですが、戦前の日本にもナチスドイツに対して同じような態度を示した層があり、それが国を大きく誤った一因となりました。「歴史は繰り返さない。ただ、韻を踏むだけである」。

早坂は、かつての日本にナチスへの共鳴者（つまりナチスシンパ）がいたことに注意を促し、それがドイツとの同盟を結ぶという日本の失敗につながった、その失敗を繰り返さないために、中国を積極的に批判するべきだと主張している。

坂東は4月13日につきのようにツイートした。

チベットも監視社会がほぼ完成しているようで、もう状況が日本に伝わらないほどに抑え込まれている模様。「まるでナチスのようだ」というより、中国はナチスを超えている。そんな社会に加担しないようにしましょう。…さあ五毛党が湧いてくるぞ。ともに叩き潰そう！

五毛党とは本来、中国共産党が従えたインターネット上の世論誘導集団のことだが、坂東はここでおそらくインターネット上で活動する日本人の中国シンパを指しているのだろう。中国は「ナチスを超えている」というのが坂東の主張だ。

日本の右翼知識人のうち最大規模の影響力を誇る百田は、22日につきのようにツイートした。

ナチス以上の人権蹂躪を行なっている国でのオリンピックなど、ボイコットするのが当然。また、北京オリンピックが開催中止になれば、習近平にとって大きなダメージになる。逆に盛大に行われたら、習近平の独裁に大きな追い風となる。

百田は、中国は「ナチス以上の人権蹂躪を行なっている」と批判する。坂東といい百田といい、いかにも右翼らしく表現が誇張たっぷりだ。百田は、2022年2月に迫っていた北京オリンピック冬季大会のボイコットを呼びかけている。

北村は、4月27日につきのようにツイートした。

強制収容所の人々から臓器を強制摘出し、年間10万件以上の臓器を世界に提供する中国共産党。ウイグルのカシュガル空港には、かつて臓器専用通路があり、12歳以上のウイグル人にDNA生体検査を義務付けている(「命がけの証言」より)。中国共産党とナチス党、ヒットラーと習近平の違いはどこにあるのか

北村は、中国政府がウイグル人から臓器を摘出し、海外に売っているという噂を記しているが、これはナチス政権下でおこなわれていたユダヤ人に対する人体実験との連想を図っているのだろう。血なまぐさい表現をしたがるところが、いかにも右翼的かもしれない。北村は「中国共産党とナチス党、ヒットラーと習近平」は同質的だと弾劾している。

以上のように、たった1カ月のあいだにも、日本のインフルエンサーたちは政治的な左右に関係なく、熱心にナチスの悪質な事績への参照を促しながら、自国や他国を批判していた。これは、日本政府や日本軍の戦時中の行動がつねに論争的で、それらを引きあいに出すと、異なる見解を持つ人に主張が届かなくなるという事情が関与している。ある意味では「便利使いできる絶対悪」として、ナチスが活用されているのだ。

これらの「ナチスについての政治的な語り」は、「ナチスについての非政治的な語り」よりも現実主義的で、より空想性が低い傾向がある。前節で考察した麻生太郎の語りにしても、本節で

見たインフルエンサーたちの語りにしても、サブカルチャーを介して膨らんだナチスに対する妄想じみた想念からは、それなりに距離が置かれている。

だがすでに述べたように、「ナチスについての政治的な語り」と「ナチスについての非政治的な語り」は相補的な影響関係を結んでいる。ツイッターを開いてさまざまなツイートを読むユーザーたちは、ナチスについて本格的な知識を持ちあわせていなくても、ナチスのモチーフを利用したサブカルチャーでナチスについてある程度の知識を持っていることが多く、インターネットなどからさらに追加の情報を得ることができる。だからインフルエンサーたちが話題をナチスに絡めてツイートすると、それは彼らのフォロワーたちの心に響くし、もちろんインフルエンサーたちはそれを知っているからこそ、ナチスに言及したがる。

## 6. おわりに

以上で、本稿を終える。ドイツから遠く離れた日本では、ナチスの蛮行について、なんとなくのイメージは共有されていても、具体的なことはほとんど知られていない。日本版のウィキペディアには、ナチスに関する多くの記事が寄せられているが、それらを読むユーザーは限られているだろう。

日本では、ヒトラーのカリスマ性やナチスの美学が、しばしば個性的で魅力的なものとして、非政治的に受け止められてきた。ドイツ人は、あるいはほかのヨーロッパ人やユダヤ系の人々は、このような状況に驚いてしまうかもしれないが、彼らも日本人や、日本を含む東アジアに対してしばしば実態から乖離したイメージを持っているため、このようなイメージのずれ方は、極端な現象とは言いきれない。日本人のナチスのイメージは、ある種のヴァナキュラー文化なのだ。

## 参考文献

(引用、言及、参照を指示したものに限定する)

飛鳥昭雄 / 三神たける『失われた悪魔の闇預言者「ヒトラー」の謎——ペンタゴン魔法陣に潜む闇の女霊媒師が地獄の墮天使ルシファーを召喚している!!』、ワン・パブリッシング、2020年

白井嘉一 / 古俣智洋「戦争学習における加害と被害の扱い方」、『福島大学教育実践研究紀要』41号、2001年、19-26ページ

キース、ジム『ナチスとNASAの超科学』、林陽（訳）、徳間書店、2007

磯川全次『「ナチス憲法」一問一答——ワイマール憲法の崩壊と日本国憲法のゆくえ』、同時代社、2017年

五島勉『ノストラダムスの大予言』、祥伝社、1973年

笹川英資『超権力グローバル・ゲーム——爬虫類DNAと人類支配の秘密』、工学社、2000年  
小林よしのり『戦争論——新ゴーマニズム宣言 SPECIAL』、幻冬舎、1998年



- 佐藤卓己（編著）『ヒトラーの呪縛——日本ナチカル研究序説』、中央公論新社、2015年
- 篠田航一『ヒトラーとUFO——謎と都市伝説の国ドイツ』平凡社、2018年
- 島村恭則『みんなの民俗学——ヴァナキュラーってなんだ？』、平凡社、2020年
- 辻元清美「麻生副首相のいわゆる「ナチス発言」「一部撤回発言」に関する質問主意書」、衆議院、平成二十五年八月五日提出質問第六号、2013年  
([https://www.shugiin.go.jp/internet/itdb\\_shitsumon.nsf/html/shitsumon/a184006.htm](https://www.shugiin.go.jp/internet/itdb_shitsumon.nsf/html/shitsumon/a184006.htm))
- 手塚治虫『アドルフに告ぐ』全4巻、文芸春秋、1985年
- 永野護『ファイブスター物語』既刊16巻、角川書店、1987年-
- 並木伸一郎「南極のナチス第4帝国と地底UFO」、『ムー』2014年2月号、学研プラス、14-37ページ
- 西尾理『学校における平和教育の思想と実践』、学術出版会、2011
- 長谷部恭男 / 石田勇治『ナチスの「手口」と緊急事態条項』、集英社、2017年
- 福嶋亮大『ウルトラマンと戦後サブカルチャーの風景』、PLANETS / 第二次惑星開発委員会、2018年
- プランク(編)『ジ・オウム——サブカルチャーとオウム真理教』、太田出版、1995年
- マハタン、ロータル『ヒトラーの秘密の生活』、赤根洋子(訳)、文藝春秋、2002年
- Frank, Hans, *Im Angesicht des Galgens. Deutung Hitlers und seiner Zeit auf Grund eigener Erlebnisse und Erkenntnisse*. München (Friedrich Alfred Beck), 1955
- Friedrich, Jörg, *Der Brand. Bombenkrieg 1940-1945*. München (Propyläen), 2002
- Grass, Günter, *Im Krebsgang. Eine Novelle*. Göttingen (Steidl), 2002
- Landig, Wilhelm, *Götzen gegen Thule. Ein Roman voller Wirklichkeit*. Hannover (Hans Pfeiffer), 1971
- Machtan, Lothar, *Hitlers Geheimnis. Das Doppelleben eines Diktators*. Berlin (Alexander Fest), 2001
- Mattern, Willibald / Friedrich, Christof, *UFO's. A Nazi Secret Weapon?* Toronto (Samisdat), 1975
- Sebald, W. G., *Luftkrieg und Literatur. Mit einem Essay zu Alfred Andersch*. München / Wien (Hanser), 1999
- Summerhays, Colin / Beeching, Peter: „Hitler's Antarctic Base. The Myth and the Reality“, *Polar Record* 43 (01), 2007, S. 1-21
- Spiegel, „Sie fliegen aber doch“, *Der Spiegel*, 29. März 1950. (<https://www.spiegel.de/politik/sie-fliegen-aber-doch-a-7a736440-0002-0001-0000-000044447768>)
- Spiegel, „Hitler-Abstammung. Dichte Inzucht“, *Der Spiegel*, 24. Juli 1967. (<https://www.spiegel.de/politik/dichte-inzucht-a-3552da85-0002-0001-0000-000046251821>)
- Vogel, Ezra, *Japan as Number One. Lessons for America*. Cambridge, Mass. / London (Harvard University Press), 1979

Wesselski, Albert, *Versuch einer Theorie des Märchens*. Reichenberg i. B. (F. Kraus), 1931

#### 注記

本稿は、2021年8月11日にフライブルク大学で開催されたドイツ民俗学会口承研究部会第11回大会「政治的な語り——ナラティブ、ジャンル、ストラテジー」にオンライン参加し、発表した„Politisches und unpolitisches Erzählen über NSDAP in Japan“を加筆訂正しつつ日本語に翻訳したものである。